

金融危機下における銀行のポートフォリオ選択：戦前日本のケース

名古屋学院大学 澤田 充

本研究では、戦前の日本のデータを用いて、金融危機下における銀行のポートフォリオ選択に関する計量的な考察を行った。具体的には、銀行の資産ポートフォリオの変数として有価証券貸出比率に焦点を当て、預金ショックおよび資本ショックの影響を分析した。実証分析の結果、預金ショックに関しては強い正の影響を確認することができた。さらに、流動性比率と預金ショックの間には負の相関関係を検出しており、預金減少に直面した銀行は保有有価証券を売却して手元流動性を確保した可能性を強く示唆する結果を得た。一方で、資本ショックに関しては、概して強い効果は見られなかった。このように資本ショックよりも預金ショックの影響が強く表れた可能性として、預金保険制度が存在しない下で多くの銀行は預金取り付けなどの流動性危機に常にさらされていたため、銀行のポートフォリオ選択は、リスクの調整よりも流動性の調整という側面が強かったことが推察される。さらに、機関銀行の特性を考慮して規模と資本ショックの交差項を説明変数に加え、追い貸しの可能性についてより詳しい分析を行った。その結果、地方の銀行では資本ショックの単独項は正、規模との交差項は負の影響を与えていることが確認された。地方の中小銀行は取引先の分散化が難しく、関係企業へのエクスポージャーが大きかったため、負の資本ショックに直面した場合、追加的な融資を行わざるを得なかった可能性を指摘することができる。